

〔劇評〕

オデオン座の『フェードル (ズ)』

岩切正一郎

2017年春に上演するラシーヌ作『フェードル』の翻訳台本を担当していることもあり、2016年春に、パリのオデオン座で上演されたクシシュトフ・ヴァルリコフスキ演出 *Phèdre(s)* を観た。タイトルが複数形になっているのは、フェードルが登場する二つの現代劇、ワジディ・ムアワド作『雌犬』(2016年、書き下ろし)とサラ・ケイン作『フェードルの愛』(1996年、英語からの翻訳)、およびクツェーの小説『エリザベス・コストロ』の一節からの翻案、をその順に舞台にのせるという構成になっているからだ。

ラシーヌのフェードルは、主演のイザベル・ユペールが演じるエリザベス・コストロ(小説家で、ジャーナリストからインタビューを受けている、という設定になっている)が、突然椅子から立ち上がり、フェードルからイッポリットへの有名な告白の場面を演じてみせるところで出てくる。「*Et bien ! connais donc Phèdre et toute sa fureur. / J'aime [...]*」その、大きく両腕を広げた仕草と高らかに迸る台詞回しは、私はDVDでしか観ていないが、パトリス・シェロー演出、ドミニク・ブラン主演の『フェードル』の同じ場面のそれを意図的に模倣し再現しているように見えた。

舞台上のインタビュー場面は、神が人間に生きさせている苦しみや運命についての考察で、そこに不意にアレクサンドランの長台詞が響き渡る。私の横に座っていた男性は、連れの、外国訛りのある女性に、ここぞとばかり「これはラシーヌだよ」と、小声で得々と解説してあげていたが、女性は彼が思っているよりも十分に教養があるらしく、「知ってる」と少々はた迷惑そうに答えながら舞台を見続けていた。

別の日には、先生に連れられたリセの生徒たちも真夜中近くに終わるソワレを観に来ていた。舞台上には、経血に染まった大股開きのフェードルなど、なかなかすごいシーンも頻出なのだが、さらけ出される愛と身体の諸相に耳目を凝らし、暗

転して幕になると感動の声を発していた。

劇全体は、エウリピデス、セネカ、ラシーヌを下敷きにしながらも、徹底的に現代文明の世界へ移され、再解釈されている。たとえばケインのイッポリットは、高潔で狩りを好む青年から、太って、チップスを食べ、ラジコンカーで遊ぶ引きこもりの王子になり、古典の恋愛嫌いは、ここでは、肉体が性的刺激に反応する時にも、心は、テレビを見ながら平然としているという類の無関心へと変形されている。古典における森は、演出家によって巨大な透明な箱の空間へ変形されていた。

ところで、『雌犬』の前書きによると、ムアワドはもともとエウリピデスとセネカの仏訳された台詞をより現代的に詩的に書き直す仕事を演出家に依頼されていたそうだ。それを二人で専らメールのやりとりを通じて進めていくうちに、書き下ろしで行くことに変更したのだという。その過程でムアワドが発見したのは、フェードルの祖母エウロペが牛の背中に乗って攫われた海岸は、彼が子供時代に親とピクニックに来ていたシドンの海岸で、レバノン生まれの彼とはその意味で繋がっており、彼はフェニキア人のフェードルをそこに見いだしたのだ、という。「ラシーヌ的エクリチュールの宝石であるフェードルは、地中海東側の女(Lévantine)、淫乱な女(une chienne)」であり、ヨーロッパの観客に、彼女の根底にはアジアがあることを再言明することができた、と記している。逆手に取った「オリエンタリズム」と言えようか。

西欧文明、現代文明の只中に胎動し続け、作家に再所有化されたフェードルが、演出され演じられて観客に再所有化され、新しく誕生する、その醍醐味を感じた舞台だった。

(本稿は、雑誌『悲劇喜劇』(783号)の寄稿記事と重複している箇所がある。それでも良いとお許しを得て掲載して頂くこととなった。会員の皆様には海容をお願いする次第である)